

少年時代

マンションの一室――。ベッドの上で乱れ狂う女――。白川留美。しらかわるみ

彼女は白い体を激しく悶えさせながら、金田健司かねだけんじのピストンを股間に受けて、よがり狂っていた。二十三歳の彼女は股の間に健司を咥え込み、両脚で彼の体を挟み込んでいる。

そして留美の口からは叫ぶような喘ぎ声が止めどなく吐かれていた。バストを揺らしながら、次から次へと襲いかかってくる快感に身を委ねてい

る。

「ああ！ ああ！ んん、もつと、もつといっぱい突いて！ ケンジっ、ケンジっ！」

留美は両手で自分の頭を挟んだり、シーツを掴んだりして激しく感じていた。

その体位に飽きた健司は、一度ペニスを抜いて、今度は彼女をうつ伏せにして、高々と尻を上げさせた。そしてバックから突き入れる。

留美の腰をしつかりと固定して、再び抽送を始めた。彼女は髪を振り乱しながら、そのピストンを体内に受けて、また乱れ始めた。留美の胸では美しいバストが勢いよく揺れ、彼女の淡い乳首は、まだ若さをたたえている。

この部屋で彼女を抱いてから、かれこれ三時間ほど経つ。健司の体力も

ピークを迎えていた。ようやく絶頂が訪れて、いよいよ射精というときだった。

「中がいい？ 外がいい？ どっちだ？」

「外に出して」

留美が後ろを振り返って言った。彼はラストスパートのように腰を高速に振り始め、やがて射精感が沸き起こり、その瞬間にペニスを引き抜き、彼女の白い臀部にそれをかけてやったのだ。白濁液がとろりと留美の素肌を流れていった。

そして健司はシーツの上に体を投げ出し、大の字に寝転んだ。留美も一旦はベッドに沈んだが、すぐに気だるく起き上がって、長い髪をかき上げた。